

\* \* \* \*

*Erigeron karwinskianus* var. *mucronatus* の胚学的研究を行った。花粉のタペタム形成はアメボイド型である。胚嚢形成には 2 通りあって、ひとつは *Drusa* type で、胚嚢母細胞は 4 回核分裂して 16 核になるが細胞膜はできず、これが直接胚嚢となる。16 核の内から 1 個の卵細胞、2 個の助細胞、2 個の極核ができ、残りは 1-2 核をもつ 2-7 個の反足細胞となる。もうひとつは *Ixeris* type で、胞子母細胞が減数分裂せずに直接胚嚢母細胞になり、3 回分裂して 8 核となり、普通の胚嚢を作る。この場合反足細胞は 3 個であるが、分裂して 4 個になることもある。*Drusa* type は授精によって胚と胚乳形成が行われるが、*Ixeris* type は授精せずに胚と胚乳形成が行われる。胚乳形成は細胞型である。胚形成はコンギク型サワギク変型である。

○ウメバチソウの紅葯品種 (大場秀章・梅津幸雄) Hideaki OHBA & Yukio UMEZU: A form with red anthers of *Parnassia palustris* L.

ウメバチソウ属は通常白または淡黄色の花を開く。また、葯の色はウメバチソウでは淡黄色 (象牙色) である。ところが、最近大分県下で葯が紅色で、時に花卉も紅色を帯びたウメバチソウが見いだされた。ウメバチソウ属でこのような変異が他にも知られているかどうか明らかにできなかったが、少なくともウメバチソウでは未知のようである。

生育地は、山間の水田ののり面である。のり面の上部はスギ林に覆われているが、その最下部は草刈りにより維持されていると考えられる草地で、そこにウメバチソウが生育している。紅葯の個体は他にも数個体あった。普通の白花・淡黄色葯のウメバチソウは、のり面に多数見られた。

材料を提供され研究の機会を与えて下さった大分県在住の麻川尚良氏にお礼申し上げます。

*Parnassia palustris* L. var. *multisetata* Ledeb. f. **rhodanthera** H. Ohba et Umezu, f. nov.

A typo antheris ante dehiscentam carmineis etiam saepe petalis dilutissime incarnatis bene differt.

Nomina jap. Beni-shibe-umebatisô, nov.

Typus. Japonia. Kyushu: praef. Oita, Orito oppidi Yabakei, alt. 260 m (Takao Ono et Takayoshi Asakawa, 18 Oct. 1984, TI)

(東京大学 総合研究資料館植物部門・福岡県築上郡吉富町幸子)